家庭科におけるゲストティーチャーを招いた遠隔教育の授業実践

－ポスト・コロナ時代の新しい学びに対応できる教員の育成に向けて－

山口大学　西　尾　幸一郎
北九州市立大里柳小学校　横　山　日菜多
山口大学教育学部附属光小学校　坂　本　真友香
山口県立山口農業高等学校　山　野　京　子

Ⅰ．はじめに

1．研究の背景

中央教育審議会は 2021 年 1 月、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」と題する答申をまとめた。その中で、ICT 活用は学校教育に必要不可欠なものとして位置付けられており、現職教師には、子どもたちの発達の段階に応じて、対面指導と遠隔・オンライン教育とのハイブリッド化による指導の充実が求められている。そして、教員養成課程においては学生に ICT 活用指導力を身に付けさせることや、模擬授業などで ICT を活用した演習を行うことなどが期待されている。

新型コロナウイルス感染症対策もあり、大学でもオンライン授業が各地で展開されるようになった。また、学生自身も「受講者(サービスの受領側)」としてだけでなく、「教育者(サービスの提供側)」として、児童生徒を対象にオンラインを活用した様ざまな教育活動を企画・実践するケースも各地でみられるようになった[1)]。ただし、そのほとんどは有志の学生により課外活動として実施されたものであり、正課の講義や演習などの一環としてハイブリッド化による指導が位置付けられているケースはほとんどみられない。現在の大学生は、コロナ禍において同時双方型のオンライン授業やオンデマンド授業、課題提示型授業などの様ざまな形式の授業を数多く経験する中で、ネットを介してのコミュニケーションの方法や情報の伝達方法などを学び、ICT 活用技術を飛躍的に高めている。また、教育学部生の中には、それらの知識・技術・経験を活かして、学校現場で様ざまな教育実践を行うことに対する意欲や関心は非常に高い。

一方、学校現場では GIGA スクール構想により1人1台端末やネット環境が整備されたものの、その運用に関しては自治体・学校間での格差が目立つため、まずは教員の負担感を解消し、柔軟な発想で教育活動に取り組む必要性が指摘されている。

そこで、筆者らは、大学と小中高等学校が学校間で連携し、教員養成課程における様ざまな専門科目の一環として、学校現場で大学生が ICT を活用した授業を実践するプログラムを開発すれば、大学生の ICT 活用指導力を向上に資するだけでなく、現職教員が直面している問題・課題の改善にもつなげていけると考えた次第である。

2．研究の目的

共同研究の最終的な目的は、家庭科教員養成課程における様ざまな専門科目の中で、実際の学校現場で学生がオンラインを活用した教育活動を企画・実践する機会を提供する教育プログラムを開発し、その有効性を検証することにある。そのための個別的課題として、筆者らは大学の講義の中で、小学校や高等学校の家庭科におけるゲストティーチャーを招いた遠隔教育の授業づくりに取り組んできた。本稿では、学生によって行われた授業実践の内容とその成果についていくつか紹介する。

Ⅱ. 授業実践

1. 題材名　カナダの方と年末年始の過ごし方を交流しよう！（付属小学校5年生 29 名）

2. 題材設定の背景

⑴題材観

自分たちの家族のふれ合いや団らん、暮らしや生活習慣などの大切さについて、異なるルーツを持つ海外の方から指摘されることにより気づかされることがある。そこで、本題材では、海外の方との交流を通して、それぞれの暮らしや気持ちを伝えあったり、互いに認め合ったりする中で、自らや他者の価値や魅力に気づき、ふれ合いをもつ楽しさや喜びを感じるような体験をさせたい。この体験を通して、家庭生活をよりよくしようとする態度を育てたいと考え、本題材を設定した。

⑵児童観

児童は、外国語の授業で外国人の ALT と交流活動があり、海外の生活や文化、考え方の違いなどについて学ぶ機会がある。また、事前におこなった調査では、外国人の友人がいるとした児童は 44.8％（13 名）、海外への渡航経験があるとした児童は 34.5％（10 名）となり、半数近くの児童がプライベートでも何らかの国際交流を行っていることが伺える（図 1，2）。一方で、カナダの人たちは年末年始にどのような過ごし方をしていると思うかを尋ねたところ、「神社にお参りに行く」「お年玉をもらう」「大掃除をする」「お笑い特番を見る」「初日の出を見に行く」などといった日本人の過ごし方として特徴的なものをあげる児童が多く、生活や文化の多様性に関する理解はまだ十分に進んでいない状況が見られた。

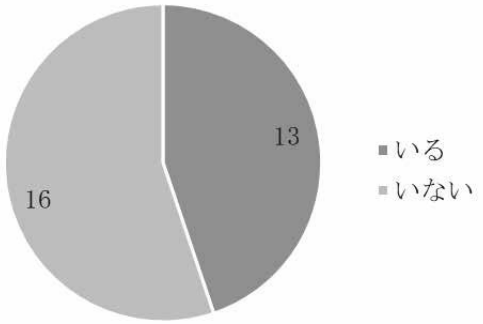

図 1　外国人の友人の有無

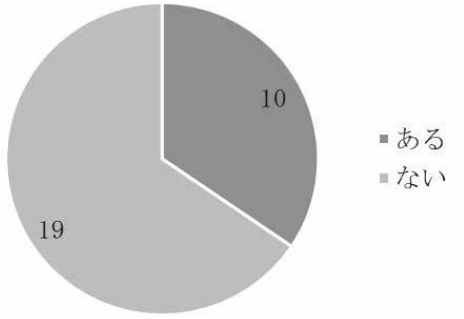

図 2　海外への渡航経験の有無

3. 題材の目標及び計画

⑴題材の目標

カナダの方と年末年始の過ごし方について交流する活動を通して、自国の文化と他国の文化を比較し、互いの文化の違いや良さについて理解することができる。

⑵実施時期

2021 年 12 月から 2022 年 1 月

⑶授業者

山口大学教育学部附属光小学校　5 年担任　坂本真友香（第1、3次）、山口大学教育学部4年（当時）　横山日菜多（第2次）

⑷ゲストティーチャー

フィリピンにルーツのあるカナダ人小学校教諭と看護師の夫妻、日本人留学生1名（通訳担当）

⑸学習指導計画（全 5 時間）

本題材の学習指導計画は表1に示す通りである。

第1次1時間目は、年末年始における日本人の文化や特徴について気づくことをねらいとした。子どもたちに本題材ではカナダの人たちとオンライン接続し、「年末年始の過ごし方」に関する情報交換をすることを伝えた。まず、4、5 人ごとの班に別れて、児童に各家庭での過ごし方について想起させ、それぞれの過ごし方を発表させた。次に発表されたものの中から年末年始における日本人の文化や特徴でカナダの人に紹介してあげたいことを各班で 3 つずつ選択させた。そして、それらをカナダの人たちにクイズ形式で楽しく分かりやすく伝えられるような問題を班ごとに考え、Keynote（Apple 社）を使ってプレゼンテーション資料を作成させた。第1次 2 時間目では、児童が英語で自己紹介をする練習や、クイズを出題する練習を行った。

第2次では、海外の人たちとの交流を通して、自国と他国の文化の違いやそれぞれの良さに気づくことをねらいとした。交流にあたっては、Web ミーティングサービスを使ってカナダの一般家庭のリビングルームと日本の小学校の教室をオンラインで接続した（図 1,2）。なお、交流での使用言語は主に日本語であり、カナダ人が英語で発言する際は日本人留学生が通訳した。授業にあたっては、授業者が接続前に前時のふり返りと本時の流れの説明、カナダの地理的特徴や日本との時差について紹介を行った。接続後は、まず児童がゲストティーチャーのカナダ人夫妻に対して英語で自己紹介を行った。次いで、カナダの方からそれぞれの自己紹介と、写真を見せながらカナダでの the holidays（年末から年始にかけてのクリスマス休暇）での家族での過ごし方や家庭料理、地域のイベント、現地の小学生が作ったクリスマスデコレーションなどが紹介された。その後、児童は班ごとに前時に用意したクイズ（表2）を出題し、カナダの方からの質問に答えた。

第 3 次では、英語での手紙の書き方や内容の構成などについて知ることをねらいとした。こ

表1　学習指導計画

次	科目	主な学習活動・内容
第1次	家庭科 （1 時間）	○家族での年末年始の過ごし方について班ごとに話し合い、クラス全体で共有する。そしてカナダの方に日本の生活文化について知ってもらうためのクイズを班ごとに作成する。
	学活 （1 時間）	○英語での自己紹介、クイズを出題する練習をする。
第2次	家庭科 （2 時間）	○カナダの一般家庭と日本の小学校をオンラインで繋いだ遠隔授業を行う。まず初めに英語を用いお互いの自己紹介を行う。次に、カナダの方から The Holidays の家族での過ごし方について教えてもらう。次に、日本の小学生が班ごとにクイズを出題する。最後にそれぞれに対しての質問タイムの時間を設ける。
第3次	外国語 （1 時間）	○カナダの方にお礼状と、カナダの小学生に Message card を一人一枚ずつ英語で書く

こでは、ゲストティーチャーにお礼状と、カナダの小学生にMessage cardを一人一枚ずつ英語で書く活動を行い（図 3）、授業後に国際便で郵送した。なお、第 3 次は当初の予定では 2 時間計画になっており、ここではカナダの小学生から来た返事の手紙を紹介しあう予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、国際便の配達に大幅な遅れが生じたためやむなく中止の運びとなった。

4. 教育的効果の検証方法

本実践の教育的効果について検証するため、授業開始前と授業後の 2 回にわたり質問紙による調査を実施した。質問紙の配布回収は学級担任に依頼し、全ての児童から回答があった。調査項目は、鈴木ら[5)]の開発した国際理解測定尺度（IUS2000）の中から、児童の知識・理解や価値・判断を問うような内容の質問を除外し、興味関心を問う質問のみを抽出した。さらにこれらを小学生にも理解できる表現に改良して、異文化体験に関わる 5 項目、外国語に関わる 4 項目、国際交流に関わる 5 項目の計 14 項目を設定した。回答形式は、「まったく当てはまらない（1 点）」から「よく当てはまる（4 点）」までの 4 件法で行い、4 段階のいずれか 1 つに〇を選択させた。

授業前と授業後の変化をみるために対応のある t 検定を行った。統計学的分析には，統計用ソフトIBM SPSS statistics 28 for Windowsを用いた。有意水準は 5%とし，両側検定で行った。

表 2　小学生が考えた年末年始の過ごし方に関するクイズの一部抜粋

［問］おせちの中身は何でしょう？
　A　せんべい、レンコン、キノコ
〇B　エビ、黒豆、かまぼこ
　C　魚、みかん、おもち

［問］年賀状は、何時代から始まったでしょう？
　A　1868 年から 1912 年の明治時代
　B　2019 年からの令和時代
〇C　794 年から 1185 年の平安時代

［問］紅白歌合戦はどういうチーム分けでしょうか？
　A　30 歳以上と 29 歳以下
〇B　女性と男性
　C　個人歌手と団体歌手

［問］New Year’s present を誰が誰にあげるでしょう？
〇A　おじいちゃんや親戚のおとなたちが、Kids にあげる
　B　知らない人が Kids にあげる
　C　Kids が大人にあげる

［問］New Year’s present を誰が誰にあげるでしょう？
〇A　おじいちゃんや親戚のおとなたちが、Kids にあげる
　B　知らない人が Kids にあげる
　C　Kids が大人にあげる

注）表中の〇印はクイズの正解を示す

図 1　授業の様子

図 2　授業の様子（Zoom の画面）

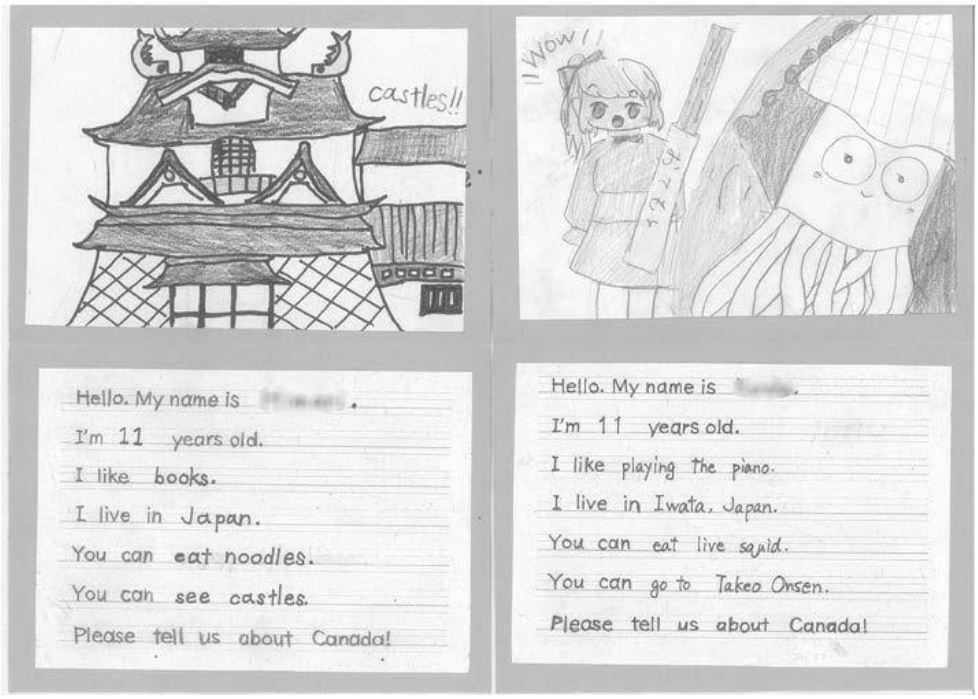

図 3　児童の作成した Message card の一例

5. 結果と考察

⑴国際理解尺度（異文化理解）の前後比較

図 4 は、国際理解尺度の異文化理解に関する 4 項目に対する回答結果を示したものである。各項目について授業前後で比較すると、「外国でその国の人たちと同じような生活ができる（2.41→2.86）」の1項目が授業前と比べて授業後では 5%水準で有意差が見られた。また、「他の国の暮らしや習慣を説明できる（2.22→2.61）」では 10%水準の有意な傾向が見られた。

本実践では、日本の小学校の教室とカナダの一般家庭のリビングルームをオンラインで接続したため、児童は実際の生活現場を観察することができた。休み時間中の交流では、児童はカメラの前に集まって、夫妻の子どもがいつも遊んでいる Nintendo Switch や、ソファの上に置かれているクリスマスプレゼントの数々、ハロウィンパーティの手作りコスチュームなどを見つけて興奮したり、カナダの方が交流流に飲んでいた飲み物は何か、カナダの子どもはどんなゲームで遊んでいるか、クリスマスは何日くらいあるのかなどの質問を次々と行ったりしていた。授業内外での交流を通して、カナダでの暮らしや習慣に関する様ざまな情報を入手する中で、日本とカナダの違いだけでなく、共通点も数多く発見できたことで、カナダを身近に感じることができたことが上記のような結果につながったと考えられる。

⑵国際理解尺度（外国語）の前後比較

図 5 は、国際理解尺度の外国語に関する 4 項目に対する回答結果を示したものである。各項目について授業前後で比較すると、「色々な国の言葉を勉強したい（3.26→3.50）」と「英語で手紙を書くことができる（2.26→2.82）」の2項目が授業前と比べて授業後では 1%または 5%水準で有意差が見られた。また、「学校以外でも英語を勉強したい」では 10%水準の有意な傾向が見られた。

授業後に児童へのヒアリングを行ったところ、「通訳担当の日本人留学生が外国人と英語で話しているのを見て格好良かった、私も話せるようになりたい」と複数の児童が嬉しそうに話してくれた。本実践では、児童の英語力が日常会話レベルに達していなかったために、現地に滞在中の日本人の留学生に通訳を依頼したが、児童にとっては語学学習に関する身近なロールモデルを示すことにもつながったと考えられる。

⑶国際理解尺度（国際交流）の前後比較

図 6 は、国際理解尺度の異文化理解に関する 4 項目に対する回答結果を示したものである。各項目について授業前後で比較すると、「外国の人が困っていたら声をかけることができる（2.96→3.36）」の1項目が授業前と比べて授業後では 5%水準で有意差が見られた。

6. まとめ

アンケートの結果から、児童が外国語を学ぶことに対する意欲が高まり、外国人との交流することに対する抵抗感が小さくなっていることが読み取れた。また、授業での児童の様子や発話から日本とカナダの生活や習慣、行事などの違いを知り、文化の多様性に気づく機会にもなったことが推察された。

以上のことから、本題材の目標はおおむね達成されたと考えられる。ただし、本実践では、ここで身に付けた知識を、家族や地域の人たちとのよりよいかかわり方を考え、工夫することができるようにするという観点については十分に検討することができなかった。

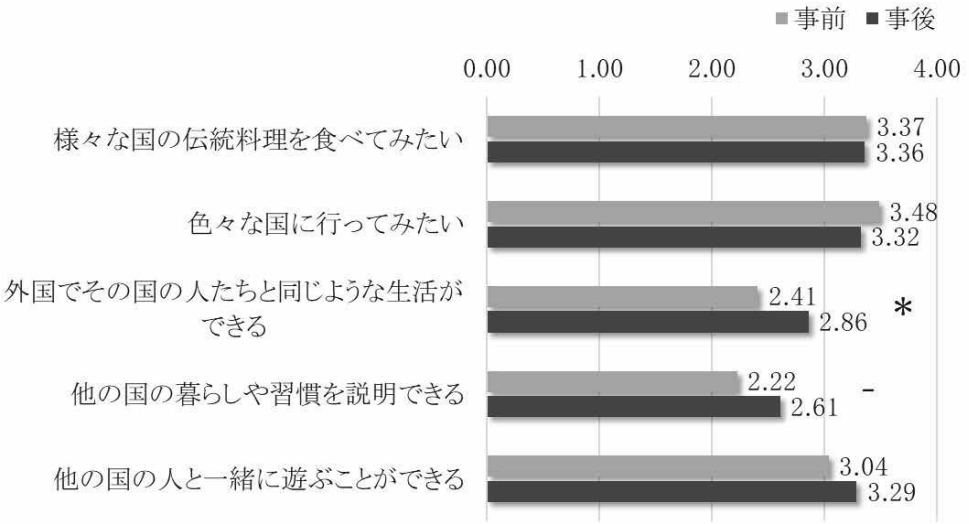

図 4　異文化理解に関する項目の前後比較

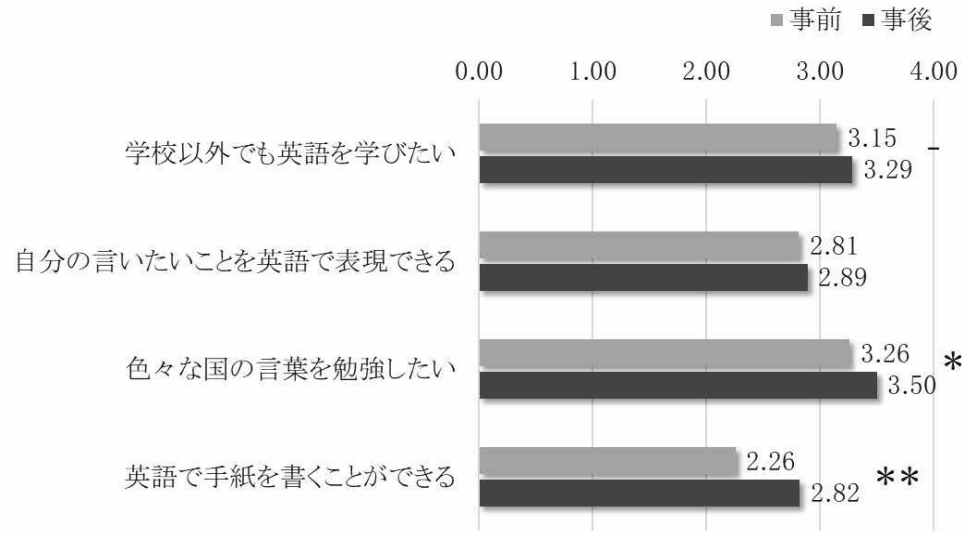

図 5　外国語に関する項目の前後比較

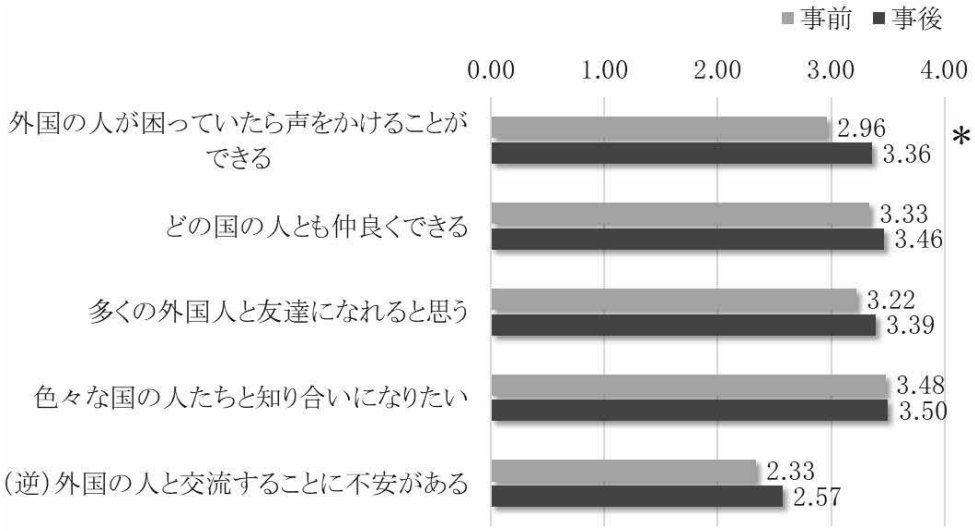

図 6　国際交流に関する項目の前後比較

Ⅲ. 教員養成に関する取り組み

1. 家庭科教育法Ⅳでの学習活動

山口大学における家庭科教員養成の講義「家庭科教育法Ⅳ」では、2020 年度から大学生に家庭科におけるゲストティーチャーを招いた遠隔教育の授業づくりに取り組ませ、高等学校で実践させる取り組みを行ってきた。大学生は1、2名ごとに分かれて、高校教諭から各題材の教育目標や進捗状況、要望などを聞いた上で学習指導計画を作成し、各自が大学生活や社会活動等などで培ったつながりの中から各題材に適した人材をゲストティーチャーとして選定した。そして、各自でゲストティーチャーへの協力依頼や授業内容の打合せ、Web 会議サービスの動作確認などを行い、授業当日に臨んだ。

学生によってこれまでに 9 回の授業が行われた。「遠隔教育の推進に向けた施策方針」での遠隔教育の類型[6)]でみると、学生による実践はすべて教師支援型の専門家とつないだ遠隔学習に位置づけられる。また、オンラインの接続形態は、講師と教室全体をつなぐ「講師－教室接続型」が 8 件、個々の児童生徒やグループ単位でつなぐ「講師－学習者接続型」1 件であった。

2. 高等学校における遠隔教育の内容

⑴外国人学生とつないだ遠隔教育

学生による授業実践として最も多かったのが「外国人学生とつないだ遠隔授業」であり、5 つの題材で授業が行われた。なお、ゲストティーチャーとして招いた外国人大学生は、山口大学の留学生（帰国したものも含む）やその友人・知人などが中心であり、学生が自分自身の人的ネットワークを使って見つけてきた人材が多い。各題材の授業に外国人学生を招いたねらいは、海外の大学生から各国の生活文化を紹介してもらい、日本との違いやそれぞれの良さについて考えさせることであった。実践された授業の内容は以下の通りである。

○消費者教育の授業では、高校生が中国、韓国、台湾の大学生に対して各国におけるキャッシュレス決済の現状について聞き取り調査を行った。その後、日本の現状や今後の課題について話し合いを行った。

○高齢者の授業では、中国人学生に中国での高齢者と家族の関わり方や共助の仕組みなどを紹介してもらい、日本の高齢化対応の進んでいるところや改善すべきことについて考えさせた。

○調理実習（図 7）では、中国人学生から中国で流行っている料理（コーラチキン）の作り方を教えてもらい、日本の高校生は郷土料理（かいもち）の作り方を教えた。

○郷土食・伝統食の授業では、まず、高校生が地域の伝統食について調べたことを中国人学生に紹介した。その後に、関連がありそうな内容についてヒアリングを行った（例えば、正月

図 7 遠隔で調理法に関する生徒の質問に答えている様子

料理を紹介した生徒は、春節の料理について調査するなど)。
○食文化の授業:韓国人学生に日韓の味付けの違いや、最近流行っている料理などを紹介してもらった。

⑵大学教員とつないだ遠隔教育

防災教育と食生活の題材で、各分野のスペシャリストをゲストティーチャーとして招いた授業が行われた。防災教育(図 8)では、防災の専門家(鹿児島大学 黒光先生)から災害時の対応や避難所生活での生活などについて説明を受け、その後、災害食づくりをおこなった。栄養学の授業では、3種類の試料の飲み比べをおこなった後で、なぜ、塩分濃度が同じでも出汁の有無や種類により、塩分の感じ方が異なるのか栄養学の専門家(山口大学 森永先生)から説明を受けた。

⑶日本の大学生とつないだ遠隔教育

ここでは、住生活と消費行動について学ぶ題材の中で、下宿生とネットショッピングでの被害経験のある大学生がゲストティーチャーとして招かれた。住生活(図 9)では、親元を離れて下宿生活を送っている大学生の下宿先をオンラインで見学し、住まいや暮らしを紹介してもらった上で、間取り図を使って自分が下宿する場合の住まい方などについて検討させた。消費行動の授業では、ネットショッピングで失敗をした経験のある大学生にその時の状況を話してもらい、高校生にその対応策について考えさせた。

図 8 防災の専門家による授業の様子

図 9 大学生の下宿のオンライン見学会

Ⅳ. おわりに

筆者らの共同研究は萌芽期にあり、まだ十分な成果をあげられていないが、学生たちの実践をサポートする中で、令和の新しい日本型教育を実現する上で今の学生たちが現役教員にはない様ざまな武器を持っていることを感じてきた。一つめは、学生自身の国内外に広がるネットワークを持っていることである。本実践に関わった学生たちはSNSで幅広いコミュニティとつながっており、ゲストティーチャーを依頼していた留学生が直前になって参加できなくなった場合にも、自らの伝手を頼って外国に住んでいる現地の学生を探し出すことができた。二つめは、コロナ禍にオンライン教育やICT活用に関する様ざまな知識や技術を身に付けていることである。大学では、多人数の講義だけでなく、少人数の実験・演習、合唱の練習、トレーニングまで様ざまな授業がオンラインで行われていた。その中で、特に教職課程の学生たちは、画面を通しての話し方やディスカッションのコツ、カメラの撮影方法、タブレットの使い分けなどの様ざまなノウハウを学んできている。本研究をさらに発展させ、令和の新しい日本型教育を担う人材の育成に貢献していきたいと考えている。

参考文献

1)「オンラインで学童保育　山口大生ボランティア、画面越し学びやダンス」『中国新聞』2020年5月31日.

2)西尾幸一郎(2021)「高等学校家庭科におけるゲストティーチャーを招いた遠隔授業の実践－ポスト・コロナ時代の新しい学びに対応できる教員の育成に向けて－」『日本家庭科教育学会第64回大会研究発表要旨集」』p.35.

3)立石生羽・西尾幸一郎(2022)「小学校家庭科と異文化理解教育を関連付けた授業実践とその効果－日本とカナダをつなぐ遠隔教育の事例より－」『日本家庭科教育学会中国地区会第41回研究発表会要旨集』p.6.

4)西尾幸一郎・黒光貴峰(2022)「高等学校家庭科での授業実践や模擬授業が大学生のICT教育自己効力感に及ぼす影響」『日本家庭科教育学会第65回大会研究発表要旨集』p.30.

5)鈴木佳苗ほか9名(2000)「国際理解測定尺度(IUS2000)の作成および信頼性　妥当性の検討」『日本教育工学会論文誌』23(4), 213－226.

6)文部科学省(2020). 遠隔教育システム活用ガイドブック　第3版. 内田洋行教育総合研究所.